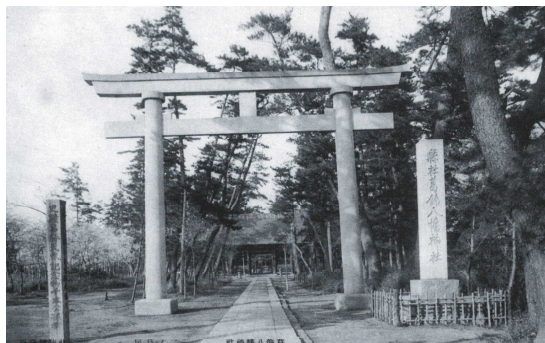


八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和4年2月） 回覧

6. 下総国総鎮守・葛飾八幡宮の鎮守の森

葛飾八幡宮境内には、市の建物が多く建ち、今次再開発でも大木が切り倒されましたが、往古は「鎮守の森」に囲まれておりました。その様子を記した資料を古い順に紹介。

- 「当社は殊の外社地は広く、木立森森として物ふり、諸人信仰を増す」（『燕石十種』所載の『葛飾紀』寛延2(1749)年刊）注：物ふる…どことなく古めかしい。
- 「封城広くして壮麗たりしが、また星霜を歴ていまは老樹鬱蒼として上久たる神垣となれり」（『江戸名所図会』天保年間 1830年頃）
- 「北側に八幡神社あり、境内広くして松杉鬱然たり」（永井荷風『断腸亭日乗』昭和21(1946)年5月8日の項）



（写真は昭和6年頃。参道は松並木、西側は低木だが東側は鬱蒼。『写真で見るわが町市川』より）

次いで私も含めた古老の子どもの頃の思い出です。

「境内ははるかに緑濃く、幾多の樹木が茂り、大きな老松も何本も生えており、全体として鬱蒼としていた。一中略一図書館、公民館、市民会館、八幡会館の在る所はいずれも木が茂った林のような所で、境内の西側では低い笹藪が下生えとなっていた。だから広い境内でも土の露出した空き地はほとんどなく、一中略一境内は自然に満ち溢れていた。兜虫も鍬形虫も結構いた。黄金虫やカナブンや嚙切虫にいたっては見向きもされないくらい沢山いた。玉虫が高い木の上で七色に輝く羽を広げて飛ぶのはとても美しかった。」

「随神門の東側にはさほど大きくない池があった。晴天が続き水が減ってくると、岸の方から底が現れるのだが、池の中央部は一段と深く掘られ、そこは板と杭で土止めされていて、その底まで干上がることはまずは無かった。（以下略、池の水が濁っていたこと、クチボソや小鮒がいたことなどが記されている）。（『終戦直後の八幡 小学生の目に映った混乱期の八幡』（佐藤勉著）より）

早朝に、樹液を吸っているカブトムシを掴まえたことや、市民会館のところにあった高い木の上に玉虫が群舞しているのを見上げていた思い出は共有しています。この池で筏遊びをしたことや、大風で池に大木が倒れ、それを橋にして遊んだこと、幼い妹がその橋から落ちて近くにいた大人に助けってもらったこと、大雨時には池の水が東側住居に溢れたことなどを語る古老もおります。

鬱蒼としていたことで、薄暗く気味が悪かったとの思い出も語られています。

日本人の神道信仰の原点は自然崇拜。「鎮守の森」があつてこそ神威が感じられ「諸人信仰を増す」のも事実。源頼朝がわざわざ下馬して参拝したことが物語『源平闘諍記』として伝わり、「駒止め石」の伝承が残る神社に駐車場が必要な時代ですが、「鎮守の森」が無くなれば虫も鳥も来ません。人類の未来も推して知るべし。

「鎮守の森」は地域の人々の癒やしの場であり、地域特有の自然な植生が見られる場であると同時に地域の災害防止の視点からも見直されています。関東大震災の時、板塀に囲まれた本所被服廠の跡地に避難した人の大半3.8万人が焼死。そこから2kmの岩崎別邸は周囲の木々に囲まれていたお陰で延焼を免れ、死者がいなかったのは事実です。